

初等教育における縄文土器の学習と土器づくりの実践

岡崎 典子^{*1}・田畑 直彦^{*2}・上原 一明

Learning of a Jomon ware and practice of making Earthen vessel in Elementary Education

OKAZAKI Noriko^{*1}, TABATA Naohiko^{*2}, UEHARA Kazuaki

(Received December 21, 2018)

キーワード：初等教育、縄文土器、図画工作、社会科、岡本太郎

はじめに

近年学校教育において、教科横断型授業の試みが注目されている。基本的に初等教育においては国語・算数・理科・社会・生活・音楽・図画工作・体育・家庭・道徳・英語という明確な教科ごとに時間割が構成され、各单元ごとに年間計画され授業が進行される。小学校教育においては、中学校教育以降更に発展した明確な教科教育を学習する以前の基礎的な段階であるので、これら教科ごとの基礎的な部分における共通部分、あるいは同じ要素を含む部分がある。これらの共通要素を考慮しながら双方の教科を包括的に学習するという考え方に基づいている。

本稿は、社会科における考古学分野である縄文土器の歴史的学習と、それを踏まえた図画工作科における粘土造形の学習を通して、児童がどのような学びを得たのかを考察する。以下、岡崎が附属山口小学校における縄文土器を題材にした授業内容とその課題を、田畑が考古学的立場から縄文土器についての専門的な解説と学校教育への活用の可能性を、上原が芸術的視点による縄文土器の意義と学校教育への活用について、それぞれの観点から述べる。

1. 実践事例 「縄文土器の世界へ」 (岡崎)

1-1 子どもの学びの実際 (第6学年) ※社会科1時間、図画工作科8時間

1-1-1 縄文土器について調べよう [社会科]

様々な形の縄文土器の用途を調べ、当時の人々の生活の知恵について考える学習である。子どもたちは、日本各地から出土された縄文土器の写真を見て、「なぜこんなにも形が違うのだろうか」という気付きをもった。話し合っていくうち、「用途によって形が違うのではないだろうか」という考えをもっていった。そこで、縄文土器の用途について調べ学習を行った。調べたことを交流していくうち、縄文土器の用途は大きく2種類あり、穀物の煮炊きや保存などの実用的なもの、呪術などに使う非実用的なものがあるということが分かった。最後に、本校の運動場から出土した土器(土師器)を鑑賞し、埋蔵文化財資料館の田畑助教に話を伺うことで、より土器を身近に感じ、製作への意欲を高めていった。(図9)

1-1-2 縄文土器の文様を試しながら鑑賞しよう [第1次の学び]

まず、社会科の時間に調べた縄文土器の文様を試す場を設定した。子どもたちは、貝殻や竹管や縄など、自然のものを使って、平たく伸ばした粘土に文様を付けていった(図2)。最初は、本に載っていた文様を真似ていたが、試していく中で、一つの用具を使うだけでも、連続させたり、回転させたりしながら、文様の付け方の工夫が多種多様にできることに、子どもたちは気が付いた。木棒に縄を巻き付けて転がすと生まれる連続文様を見て、感嘆の声を上げる子どももいた。最後に、出来上がった文様を見て、規則性がある美

*1 山口大学教育学部附属山口小学校 *2 山口大学大学情報機構

しさを感じ取ったり、何かメッセージが込められているのではないかという考えをもったりすることができた。



図1 授業の様子



図2 児童の試した文様

1-1-3 自分なりの土器を製作しよう〔第2次の学び〕

前時に試した文様をいくつかクラス全体で鑑賞した。文様の連続性の美しさと共に、「文様を組み合わせるとストーリーが感じられる」「お祭りを表わしているみたい」など、製作に向けてのイメージを広げることができた。そこで、図2のように円状につながっている文様を、紙コップの上段、中段、下段に描いて、土器の文様としてスケッチをしたもの(図3)を提示し、立体面に文様のアイディアスケッチを描くよう促した。すると、子どもたちは、文様の組合せを考えながら自分のイメージをもち、仲間と交流してイメージを広げていく姿が見られた。図2の文様を試したE児は、「人が輪になって火を囲んでおり、お祭りをしている」というイメージをもって文様を考えたと。また、貝を押し付けた文様を連続させたり、縄を回転させて波を表現したりし、「海」をイメージした文様を考えたと子どももいた。中には、紙コップの縁をハサミで切り取って形を変え、文様だけでなく、全体の形も含めて自らの土器のイメージをもっている子どももいた。

次の時間、土器の全体の形を成形した。土器の全体の形を、「筒型」「つぼ型」「円錐型」に類別し、自分がつくりたい土器の用途やイメージに合う「型」を選んでつくるよう促した。また、縄文時代より今に受け継がれているという「輪積み」の方法を演示した。授業で焼き物をつくり始める際、粘土板の上に新聞紙を敷いて底の部分置くことが多いが、縄文土器の底に葉脈の跡が残っていたということから、縄文人のように土器の底に敷く葉っぱを用意してきた子どももいた。土粘土の感触を楽しみ、ひび割れができないよう苦労しながら、土器を成形していった。

そして、3日間、少し乾燥させた半濁きの状態になったところで、文様を付けていった(図4)。立体面の側面に付けるため、アイディアスケッチのようにはいかないこともあった。しかし、用具を押し付ける力加減を変えてみたり、文様だけでなく縁や側面に飾りを付けて装飾性をもたせたりするなど、工夫して製作を行っていた。



図3 文様のアイディアスケッチ



図4 縄を棒に巻き付けたものを回転させる

1-1-4 焼成した土器を展示しよう〔第3次の学び〕

夏季休業明け、山口大学教育学部美術教育講座の焼成窯で素焼きを行った作品を手にとった子どもたちは、素焼きの感触や文様がそのまま刻み込まれていることに喜びをもっていた。出来上がった作品を1クラス34人分、図工室の机に並べると、迫力が感じられた。作品に題名を付け、仲間の表したい思いに寄り添いながら、形や文様について鑑賞する場を設けた。その後、より縄文土器のよさや美しさを味わいながら鑑賞できる展示方法を話し合った。本校の運動場から出土された土器のように、土に埋めてみたいという意見や、今時期は使用していないプールに上がる外階段に展示して一つ一つの土器がよく見えるようにしたいという意見があった。(図5)のように、土器をいくつか半分ほど土に埋めたグループの子どもたちは、「こんなふうに土器を見つけてみたい」と、発掘調査に憧れをもつ姿が見られた。また、外階段に展示したグループの子どもたちは、より自然の中に存在している土器に見えるよう、葉っぱを敷いたり、中に草花を入れたりしていた。さらには、偶然、西日があたると、文様がくっきりと浮かび上がってきれいに見えることに気が付いていた。このように、子どもたちは、単なる「作品」の鑑賞ではなく、周りの環境と考え合わせながら、「自分たちの縄文土器」として鑑賞し、よさや美しさを感じ取っていったのである(図6)。



図5 土に作品を埋める子ども



図6 外階段に展示した作品

以下は、この題材全体をとおしての子どもの振り返りである。

私は、縄文土器の写真を見た時、食べ物を煮たり保存したりするためのものだと思いましたが、呪術や儀式の為につくっている土器もあることを知り、驚きました。文様をつけるは簡単そうに思いましたが、試してみると、難しく感じました。全体の形も思い通りではなく、がたがたしていました。つくり終えて、再び縄文土器の写真を見ると、縄文人の努力も分かり、不格好だと思っていた縄文土器が形が、きれいに整えられていて美しいと思いました。今回、土器を自分でつくってみて、縄文人の気持ちが少し分かることもできたし、縄文人に対するイメージも変わりました。(A児)

1-2 実践をふりかえって

今回、社会科の学習との関連を図り、題材の設定を行った。そうすることで、縄文土器の時代背景や用途、製作の方法などの知識を得ることだけでなく、縄文人が自然を崇拝しながら、ものをつくり、自らの暮らしを豊かにしていた知恵に学ぶことが大きかったように思う。だからこそ、子どもたちは、この学習を通して、活動への意欲を持続させ、自分の土器のイメージを広げながら、縄文土器のよさや美しさを感じ取っていくことができたと考える。

2. 縄文土器について(田畑)

2-1 縄文土器について

縄文土器とは、約1万3000年前からおよそ10000年続いた縄文時代に使用された土器である。

近年の考古学では、縄文土器をはじめ、弥生土器・土師器の成形・焼成・調理方法に関する研究が飛躍的に進んでおり、以下、要点を紹介する。

縄文土器は、東南アジアの民族誌、製作実験などから、覆いがない「開放型」(図7)による野焼きで焼

成され、弥生時代になるとイネ科草燃料で土器全体を覆い、窯状の構造を作る「覆い型」（図8）野焼きで焼成されたと考えられており（小林編2017 pp182など多数）、日本の考古学界では定説化している。かつての教科書では、暗い色調の縄文土器から明るい色調の弥生土器への変化は、焼成温度が上昇したことを示すとされていたが、小林氏らの研究によると、縄文土器が暗い色調に見えるのは、縄文時代後・晩期では意図的に褐色化・黒色化されたことと、煮炊き用が大半を占めるためススで本来の色調が隠されていることが主要因である（小林編2017 pp190～191）。なお、今回の授業で焼成した土器は、縄文時代には存在しなかった窯による焼成であり、明るい色調は弥生土器・土師器と共通するので、上記について説明が必要であろう。

縄文土器の代表的な器種である深鉢（深鍋）では、理化学的な分析により「ナッツ類と肉・魚の組み合わせ」が調理され、土器の使用痕から「ナッツ類のデンプン粉と肉・魚を組み合わせた食材を、長時間煮る料理」や「硬めの食材を長時間煮る調理」が多かったと考えられている（小林編2017 pp15～16）。また、蓋を用いないことから、頑固なこびり付きが想定される料理では、頻繁な掻き回しが必要とされたことなどが考えられ、頸部の括れと胴部の膨らみが弱いことから、頸を掴んで持ち運ぶことが少なかったことなどが考えられている。さらに厚手のものが多いことから、熱伝導率の高さ（短時間強火加熱の効率）よりも保温効率（長時間加熱における冷めにくさ）が重視され、大型の比率が高いことから、儀礼・宴会含む多人数用調理にも頻繁に用いられた可能性が高い点などが指摘されている（小林編2017 pp17～21）。

調理後の土器の洗浄方法についても興味深い研究結果がある。縄文土器の深鉢（深鍋）の多くには、胴下部に帯状のコゲがある。これらには帯状のコゲ内部の中央の顕著なコゲ飛び（酸化消失）が付き、「空焚きコゲ」と判定されるものがあるが、上記については頑固なこびり付きを空焚き乾燥させることにより、カビの発生を防いだと考えられている（小林編2017 pp14）。素焼きである縄文土器には細かい孔・隙間が多い。筆者も体験したことがあるが、土器にこびり付きが多い場合、洗浄しても細かい孔に入り込んだこびり付きを完全に除去できず、カビが発生してしまう。また、運搬・洗浄の際、壁などに土器が接触して土器が破損してしまうことがしばしばある。しかし、土器を移動させずに空焚き乾燥させれば、カビの発生と破損を防ぐことができる（小林編2017 pp16）。

以上は、遺跡から出土した大量の土器を根気強く入念に観察し、復元土器による実験を積み重ねた日本考古学の研究成果の一部であるが、学校現場ではほとんど知られていないのではないだろうか。

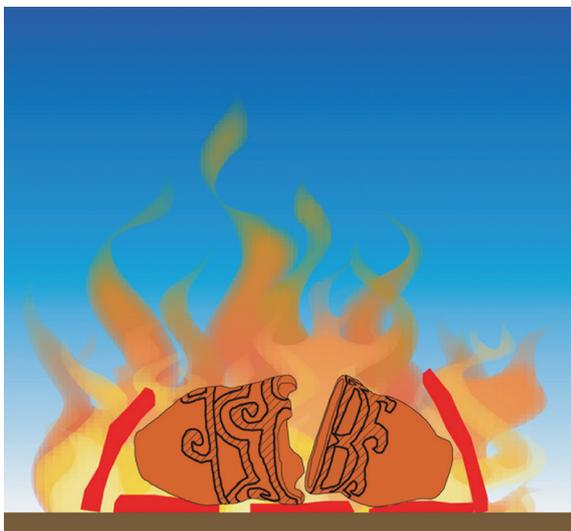


図7 「開放型」による野焼き（田畑作成）

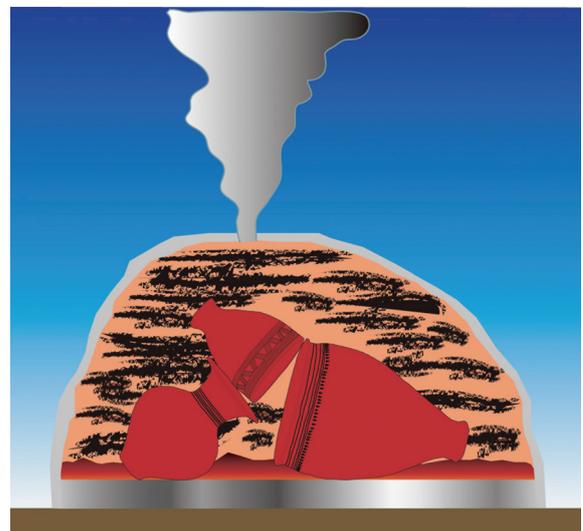


図8 「覆い型」による野焼き（田畑作成）

2-2 学校教育への活用の可能性

山口県では完形の縄文土器、もしくは完形に復元できる縄文土器が出土することはきわめて稀であるが、弥生土器、土師器については、完形もしくは完形に復元できるものが多数出土している。附属山口小学校は周知の埋蔵文化財包蔵地である「白石遺跡」（縄文～近世）の上であり、山口大学埋蔵文化財資料館では、これまでの発掘調査（図10）で出土した土器・石器・木器等の遺物を多数保管している。

筆者は、縄文土器とともに弥生土器・土師器・須恵器の実物に触れ、各時代によって焼成方法・温度や機

能が異なることを学習することで、より学習効果が高まると考える。実物に触れて質感を感じ、学習する成果は大きく、記憶に残ることは間違いない。その際には、上記で触れたような最新の研究成果も盛り込むことを望みたい。また、考古学的な視点による土器の観察等に当たっては、学校教員と考古学（埋蔵文化財）関係者との連携が求められよう。

近年筆者は山口大学公開講座「古代米をつくって食べよう」において、弥生土器の成形、「覆い型」野焼きによる焼成、復元土器での煮炊きを行っている。これまで上記講座には小学生～成人までが参加したが、遠方からの参加者もあり、世代を問わず好評を得ている。土器の成形から使用に至る一連の作業を実際に体験する学習効果も絶大である。上記をすべて授業内で行うことは困難と思われるので、より深く学習したい児童へは上記講座の参加を勧めたい。



図9 土器（土師器）の説明



図10 本校下運動場での発掘調査（昭和59年）
（提供：山口大学埋蔵文化財資料館）

3. 縄文土器の美術史的価値と学校教育における美術教育的利点（上原）

3-1 縄文土器と岡本太郎

縄文土器は、終戦後まで歴史的文物としての考古学的な位置付けでしかなかった。日本史的観点からみると知的な農耕社会以前の野蛮な先史時代の奇怪な生活品としか認識されておらず、明治以降は西洋の先進技術を受容し続け、只管技術革新に邁進する近代日本社会の中に埋没されていた。文明国民としての自意識過剰が先史時代としての縄文文化の美的価値に蓋をしてしまっていたのであろうか。しかし1950年代になって、芸術家・岡本太郎によって縄文土器は「芸術品」として発見された。彼が1951年の暮れに訪れた東京国立博物館の中に展示されていた縄文土器を見て衝撃を受けたという話はあまりにも有名であり、岡本太郎関連の書籍には、彼と縄文土器との密接な関係が必ずと言っていいほど記載されている。それほど、彼が縄文土器の造形に日本人の根源的精神を発見したことが驚きを持って受容されたということを証明している。また岡本太郎は、ヨーロッパ先史時代のケルト文化と縄文文化との造形的共通性を指摘し、先史の狩猟採取社会における人類の生活精神感覚の同一性を明らかにしていることも、文化人類学的価値を芸術的観点で証明したといえる。

岡本太郎は、戦後の日本芸術界の異端児的存在であり、これまでの日本美術界の西洋文明至上主義的風潮を打破し、日本古来の芸術の潜在的エネルギーと価値を再発見したという偉大な功績がある。1970年開催された大阪万国博覧会で彼が制作した「太陽の塔」は、当時としても異色でありながら、半世紀経った現在でも解体されることなく多くの人々に愛され続け、今年48年ぶりに当時の塔内部が公開された。原生物から人類の誕生までの進化をたどった高さ41mの「生命の樹」や、「地底の太陽」が復元公開され、そのメッセージ性は現在でも驚きを持って受け入れられている。改めて岡本太郎の作品群を見ると、やはり縄文土器の燃えるような感情表現が彼の作品群の中に表れていることを確認することができる。「太陽の塔」にも縄文時代の漲る生命力が彼の造形手法を用いて堂々と表現されている。「人類の進歩と調和」をテーマに掲げた1970年の大阪万国博覧会において、「人類は科学技術的には進歩しているかもしれないが、人間的には何も進歩はしてない。」という岡本太郎の独自の時間軸の広さは、縄文文化に対する評価の高さを示している。

岡本太郎における縄文土器とは、それにより芸術家として自らの存在価値を確証し、芸術表現をとおして

日本人の根源的精神性を確認し、科学技術の進歩に溺れることなく人間としての本質を常に認識する必要があるということを教えてくれたものであったに違いない。

3-2 学校教育における縄文土器の教材としての美術教育的利点

最新のテクノロジーが駆使された現代社会の日常生活において、小学生児童もテレビなどのメディアやタブレット端末などのITデバイス、バーチャル・リアリティー体験など、常に新しい技術を日常生活の中で活用している。「便利さ」や「目新しさ」などの興味をそそる表面的な面白さはあるが、これらはあまりにも視覚的要素に偏りすぎている。視覚的刺激は即時的な効果はあるが、記憶の中では時間と共に薄らいでいく。しかし視覚と同時に手の感触が加わると、視覚による認識性と感触による受容性が合わさり、より事象に対する感受性と意識が高まる。筆を用いて絵を描く、色を塗る、粘土で形をつくる、物を切って貼るなど従来の物理的な造形活動、これこそが図画工作科の根本的な教科価値である。五感に訴え、作る過程時の期待感と完成時の達成感や喜びを包括し、社会科や理科など他の教科との関係へとつなげれば、より広い知識と深い理解へと展開していくと考えられる。

縄文土器の造形が、なぜあのような形になったのかということを理解することができれば、現代的解釈で土器を作ることも可能であろう。縄文土器自体、狩猟の呪術的な装飾と煮炊きや食物の収納や保存に使われていたと考えられている。それを現代的な感覚に置き換えれば、楽しさを表現するために星型や花型の装飾を施したペン立てや小物入れ、植木鉢や一輪挿し、ランプシェードなどの日常生活で活用できる土器として作ることも可能である。土器という範疇であれば、800℃の素焼きの後、ジェッソで白い下地を施し、水彩絵の具やポスターカラー、アクリル絵の具などで着彩（これらの場合、表面処理として透明ラッカーを吹きつける必要がある）して完成させることもできる。陶器の範囲まで広げれば、カラフルな釉薬をかけて1200℃の本焼きをしても良いであろう。

造形するという事は必ず何らかの目的を以て行われる、ということを見事に理解させることができれば、自ずと造形の意味と作る楽しさが深まる。

おわりに

以上、岡崎が小学校における社会科と図画工作科を関連付けた縄文土器作りの授業の実践を紹介し、田畑が考古学的観点から土器についての解説を述べ、上原が岡本太郎をとおして芸術的観点からみた縄文土器の美術的価値を述べた。本稿は人類の文化遺産である縄文土器を中心に、小学校教育における教科横断型授業教材の実践、考古学的分析、そして美術における芸術的価値としてそれぞれの専門分野の視点から述べることで、その本質と教育的効果を検証し考察した。今回は社会科（歴史・考古学）と図画工作（美術・陶芸）という分野からアプローチをしたが、例えば他に家庭科（縄文時代の料理と栄養）や理科（縄文時代の自然環境と土の成分）、更にもっと広げると国語（縄文時代の言語）や音楽（縄文時代の祭祀音楽）、体育（縄文時代の運動能力と健康）などにも展開できる可能性も考えられる。また縄文時代以外の諸時代や文物、テーマでもこのような教科横断型授業が可能であると考えられる。

学校教育における教科の分別は、単に分野が異なるものと捉えられがちではあるが、ひとつの時代や文物、テーマを中心に横断学習することで、各教科の関係性やそのつながりを理解できることにつながり、より広範囲の学習理解が達成できる。

参考文献

- 岡本太郎：『縄文土器 - 民族の生命力 - 』，1952年（『現代日本文学大系97 現代評論集』，1973年 筑摩書房）
- 赤坂憲雄：『岡本太郎の見た日本』，岩波書店，2007年。
- 赤坂憲雄：『岡本太郎という思想』，講談社，2010年。
- 柴橋伴夫：『太陽を掴んだ男 岡本太郎』，未知谷，2011年。
- 井口直司：『縄文土器ガイドブック』，新泉社，2012年。
- 小林正史編：『モノと技術の古代史 陶芸編』，吉川弘文館，2017年。

第6学年図画工作科学学習指導案

6年1組 指導者 岡崎典子

題材 縄文土器の世界へ

1 本題材でめざす子どもの姿について

対象と向き合う子どもの姿【対】	他者と向き合う子どもの姿【他】	自己と向き合う子どもの姿【自】
○形や文様が美しい土器の表し方について考えている。	○土器の文様を試しながら、仲間の表し方のよさを見付けている。	○新しい表し方を見付け、自分の見方や感じ方の深まりを自覚している。

2 めざす子どもの姿を実現するために

本学級の子どもたちは、第4学年「立ち上がれ！ねん土」において、粘土の感触を楽しみながら、粘土を板状にして立たせ、思い付いたものを立体に表す経験をしている。また、第6学年社会科の学習において、様々な形の縄文土器の用途を調べ、当時の人々の生活の知恵について考えることができた。このような子どもたちが、粘土の特徴や、用具についての経験や技能を総合的に生かして土器をつくる学習に取り組む。このことは、形や色などと関わり楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養うことにつながるであろう。

本題材は、粘土の特徴や、用具についての経験や技能を総合的に生かして自分の土器をつくる学習である。子どもたちは、形や文様が美しい土器をつくるためには、どのように表したらよいかを考えながら、学習に取り組んでいくであろう。その際、試行錯誤しながら見付けた表し方について交流することを大切にしたい。そうすることで、自分の見方や感じ方を深めていくことができるからである。そこで、以下のような支援を具体化する。

- 土器の造形的なよさや美しさについて話し合う際は、発言についての具体や理由を問い返す。そうすることで、造形的な特徴を捉えることができるようにする。【対】
- 土器の文様などを試しながら、表し方について交流できる場を設定する。そうすることで、仲間の表し方のよさを見付けることができるようにする。【他】
- 製作の過程をタブレットで撮影し、振り返りや次時の製作に生かすよう促す。そうすることで、自分の見方や感じ方の深まりを自覚することができるようにする。【自】

3 本題材の目標

- 粘土の特徴や、用具についての経験や技能を総合的に生かして表し方を工夫し、自分の土器をつくることができるようにする。
- 縄文土器の形や文様のよさや美しさを感じ取ったり考えたりしながら、仲間と共に鑑賞したり表現したりする喜びを味わうことができるようにする。

4 本題材における評価規準

知識・技能(知)	思考・判断・表現(思)	主体的に学習に取り組む態度(態)
○土器の形や文様の造形的な特徴を理解している。 ○粘土の特徴や、用具についての経験や技能を総合的に生かし、表し方を工夫して表している。	○土器の造形的なよさや美しさについて、感じ取ったり考えたりしている。	○主体的に表現したり鑑賞したりし、自分の土器をつくる喜びを味わっている。

5 指導計画(全9時間)

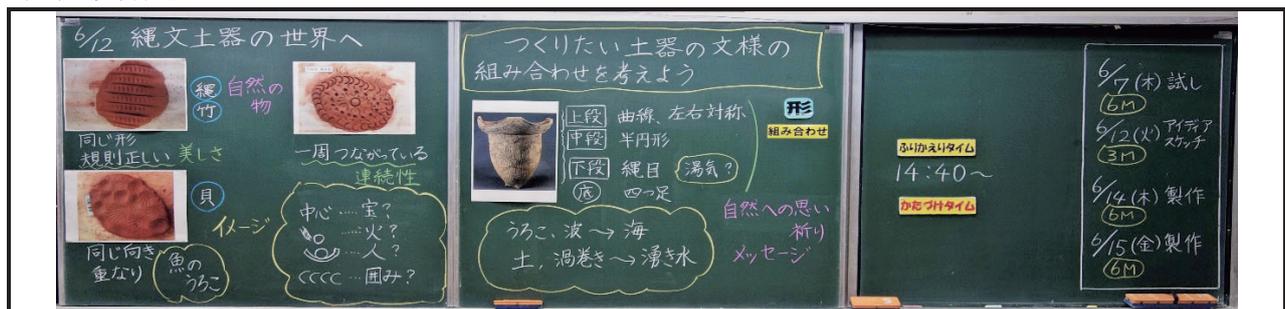
- 1次 縄文土器の文様を試しながら鑑賞する(2時間)
- 2次 自分たちの土器を製作する(5時間)【本時1/5】
- 3次 焼成した土器を展示する(2時間)

6 本時案 【平成30年6月12日 14:05~14:50 図工室】

- (1) ねらい 試した文様のよさや美しさについて話し合い、つくりたい土器の構想を練ることができるようにする。
- (2) 学習過程 ※下線は3つの向き合う姿が表れている子どもの意識

学習活動・学習内容	子どもの意識	○教師の支援
1 試した文様について話し合う。(12分) ・用具の使い方の工夫 ・文様のよさや美しさ ・表したい文様のイメージ	<ul style="list-style-type: none"> 棒に巻くひもの間隔で文様が変わったよ。 竹は向きを変えたり連続して押し付けると、いろいろな文様ができるよ。 A 規則正しく跡を付けると、同じ形が繰り返されるよ。 <ul style="list-style-type: none"> 規則正しく並ぶと、きれいだね。【対】 Bさんのように、貝を連続して押し付けて、魚の鱗みたいな文様にしたいな。【他】 土器の本物を見ると、360度どこから見ても文様が連続しているね。 	○子どもたちが試した文様のよさや美しさについて話し合う際には、発言についての具体や理由を問いつ返す。そうすることで、造形的な特徴を捉えることができるようにする。【対】
	つくりたい土器には、どのような文様を表そうかな。	
2 つくりたい土器を構想する。(26分) ・文様の組合せ	<ul style="list-style-type: none"> 上段、中段、下段で文様が違う土器があるね。文様の組合せを考えよう。 Bさんは、文様を組み合わせると、魚の鱗や波を表現しているのだから。【他】 自分の土器の文様のイメージをまとめてみよう。	○文様の組合せなどを交流しながらアイデアスケッチをかく場を設定する。
・文様の連続性 ・つくりたい土器のイメージ	A 上段に渦巻き文様を付けたいな。下段は竹で規則正しい文様を繰り返すと、水が湧き出ているみたいだよ。【対】 B 私は「海」のイメージでまとまってきたよ。 ・縄文人みたいに自然への思いを表したよ。 ・Bさんのおかげで、自分のイメージに合った文様の組合せが考えられたよ。【他】	そうすることで、仲間の表し方のよさを、自分の土器の構想に生かすことができるようにする。【他】
3 本時の学習を振り返る。(7分) ・つくりたい土器の構想	A 始めは何となくつくった文様だけど、規則正しく繰り返すと美しくなったよ。その文様と渦巻き文様を組み合わせると、湧き水のイメージでまとまったよ。次の時間、つくるのが楽しみだな。【自】	○自分の土器をどのように構想したかを振り返るよう促す。そうすることで、自分の見方や感じ方の深まりを自覚することができるようにする。【自】

(3) 板書計画

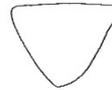
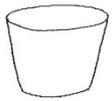


第 6 学 年 図 画 工 作 科 学 習 指 導 計 画

6 年 1 組 指 導 者 岡 崎 典 子

2 7 M (9 時 間) が 本 時

学 習 活 動	子 ど も の 意 識 〔本時案Aの意識〕
第 1 次 縄文土器の文様を試しながら鑑賞する 6 M (2 時 間)	
学 習 内 容 ・ 縄文土器の文様のよさや美しさ(知) ・ 土器をつくることへの意欲(態)	
<input type="checkbox"/> 縄文土器の文様を試してみる (6 M)	<p>・ 社会科の時間に、縄文土器は用途によって形が異なることを学習したね。自然への畏敬の思いを込めてつくったのだから。私たちの附属小学校の運動場から発掘された土器を見て驚いたよ。粘土を焼くと、何千年も形が残るのだね。今日は埋蔵文化財センターの方が、縄文土器のかけらをたくさん持ってきて下さったよ。手に取って見てみると、何かで文様が付けてあるよ。木でひっかいたのかな。ぎざぎざの文様は、貝殻を押し付けたのではないかな。いろいろな用具を使って文様を試してみよう。縄を棒に巻いて、粘土の上で転がす方法もあるのだから。うわあ。きれいな文様ができたよ。竹を突き刺す方法も試してみよう。はっきりとした跡が付くね。半円の形を向きを変えて繰り返すと、規則正しい模様になるよ。いい感じ。これをタブレットで写真に撮っておこう。Bさんは、貝を使って魚のうろこのような文様を繰り返し付けているよ。縄文時代の人たちも、こうして自分なりの文様を考えていたのかな。私たちも、自然の物を使って文様を付けた土器をつくってみたいな。</p>
第 2 次 自分たちの土器を製作する 1 5 M (5 時 間)	
学 習 内 容 ・ 土器の造形的なよさや美しさ(思) ・ 表し方の工夫(技)	
<input type="checkbox"/> 試した文様を交流しながらアイデアスケッチをかく (3 M)	<p>・ この前、試してみて、規則正しく跡を付けると、同じ形が繰り返されてきれいになったよ。Cさんがやっていた貝を押し付けて付ける渦巻きの文様もいいね。今日は、試した文様を組み合わせ、どのような土器の文様にするのか考えていな。本物の土器みたいに、上段と下段とで文様を変えてみよう。上段は渦巻き、下段は規則正しく半円が連続する文様にしよう。紙コップにかいてみると、360度どこから見ても、文様が連続しているよ。Bさんは、文様を組み合わせ、魚の鱗や波を表現しているのだから。私のは、水が地面から湧いてくるイメージかな。縄文人みたいに自然への思いを文様に表したよ。次の時間に土器をつくるのが楽しみだな。</p>
<input type="checkbox"/> 土器の全体の形を成形する (6 M)	<p>・ 全体の形は、深鉢型、坪型、円錐型があるのだね。私の土器のイメージは、深鉢型かな。深鉢型は「輪積み」でつくるのだから。回転台を使うと、土台を360度回しながら全体の形がつくりやすいのだから。まず、底の大きさを決めよう。焼くと大きさが少し縮むらしいから、出来上がりより少し大きめにつくろう。丸底の上に粘土の輪を積んでいこう。輪を積んだら、竹べらで平らにしてから、次の輪を積むとよいのだから。輪と輪の間は、指やヘラでなじませていくよ。あんまり薄いと、形がぐにゃぐにゃするね。ある程度、厚みがある方が文様を付けるのによいのではないかな。少し厚みがあると、形が整ってきたよ。だんだん広げていって、縁の部分は少し水をつけて滑らかにしよう。表面を貝で磨くと、なめらかになってきたよ。少し乾かしてから、文様や飾りを付けるのだから。次の時間が楽しみだな。</p>



<p>□文様や飾りを付ける (6M)</p> 	<p>・まず、下段に竹を規則正しく押し付けるよ。一周回って、文様がつながって見えるね。きれいにできたよ。上段は、貝を押しつけるよ。水があちこちから湧き出るイメージだから、渦巻き文様を上下に少しずらして付けたよ。そうだ、上段と下段の間は、縄を斜めに転がして水の動きを表現しよう。○さんは、何も文様がついていない所をつるつるに磨いているよ。確かに、文様を付ける所と付けない所の差をはっきりさせると、きれいだね。縁に飾りも付けたいな。王冠のような飾りのついた縄文土器を本で見たなあ。水滴が落ちた時にできる王冠のような形にしよう。飾りをしっかりとドベで接着したよ。360度、どこから見てもいい感じだ。よし、自分の土器ができたぞ。焼き上がりが楽しみだな。</p>
--	--

<p>第3次 焼成した土器を展示する 6M(2時間)</p>	
<p>学習内容 ・主体的に鑑賞すること(態) ・土器の形や文様のよさや美しさ(知)</p>	
<p>□自分たちの土器を展示する方法を考える (3M)</p> <p>□中庭に展示をし、鑑賞する (3M)</p>	<p>・大学の窯で焼いてもらったよ。うわあ。土が固まって、色が少し変わっているよ。付けた文様も浮き出ているよ。これで、たとえ水に濡れても、半永久的に形が残るのだね。すごいなあ。こうしてみんなの土器が並んでいると、大量の土器が発掘されたみたいだ。運動場に縄文時代を再現することはできないけど、中庭にみんなの土器を並べたり少し埋めたりして展示してみたらどうかな。中庭に入って見てもらえるよう道をつくろう。どこに置こうかな。そうだ、地域や時代によって、土器の形や文様が変わっていたように、みんなの土器を種類ごとに集めて並べたらどうかな。</p> <p>・よし、中庭に展示するぞ。土に四分の一ぐらいは埋めると自立できるよ。土器は、貯蔵用として使っていたものもあるのだから、中に、どんぐりを入れたらどうかなと思って、持ってきたよ。私は、縁に飾りが付いている人たちと一緒に、中庭の東側に土器を埋めたよ。○さんは、少し傾けて埋めているね。本当に土器が発掘されたみたいだね。</p> <p>わあ。学校の中庭に縄文時代を蘇らせたみたいだ。そうだ、「縄文の庭」と名付けようよ。たくさんの人に、見て楽しんでもらいたいな。</p>